「お父さーん」

慰霊、遺骨収集について想う

河野　学　陸自81

「お父さんと呼んだことがない、叱られたこともない、ましてや褒められたことなんて一度もない」

外木隆治

1　やっと会えた

ブーゲンビル島は緑豊かなジャングルの島、父が亡くなったこの地は島に足を踏み入れたその時から島全体が聖地にも墓場にも感じられた。先の大戦から60年初めて戦地を訪れて衝動に駆られ「お父さーん」と叫んだのは、全員が60歳前後で先の大戦で父親を亡くした方々達。父の最後と思われる草の原に跪き、白髪頭も禿頭も皆一様に子供に還って、涙や鼻水でくしゃくしゃな顔をして天に向かい、地に向かい「お父さん、お父さん」と声も枯れよと何度も泣き叫んだ…それがいつしか嗚咽となる。生まれて初めて声に出して「お父さん」と呼んだ。嬉しかった。何故か懐かしさが込上げてきて、見たこともない父に抱かれたような不思議な安らぎを感じた。

大戦で父を亡くした母子は、食料のない中生きることに精一杯で父を振り返る余裕もなかった。そして苦労しながら成人を迎え、新たな家族を持ち自分が柱となって支える。社会の中でしっかりと壮年の活躍をし、子供達も独立して初老。心の余裕ができふっと人生を振り返る。戦争で亡くなった父の人生は？　父が亡くなったこの地にやっと来れた。その時永年押し込んでいた思いを解き放つように、記憶にもない父を心の底から呼び叫んだ。それが今やっとできる親孝行だった。これはこの島だけでなく、父を亡くした家族にとって同じ情景だったに違いない。

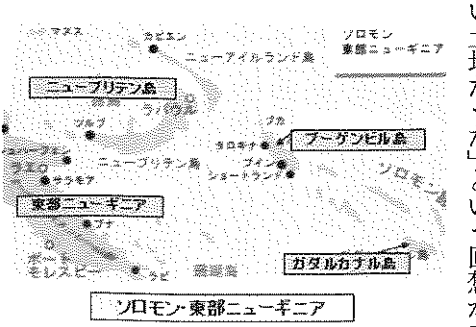
この話を教えて頂いたのは、富士学校勤務時御殿場市萩原地区の自治会で知った83歳の外木隆治氏、当時60台後半の方だった。自治会会長で百人規模の建設会社の社長さん。地区の公民館建替え事業の中心として活動されていた。役員から色々な主張があり、意見が紛糾する時も冷静に話を聞き、各々の立場を尊重しつつ大きく物事が進むよう運営され落成まで漕ぎつけられた。私も官舎役員として広報紙のお手伝いをしていた。月1回の委員会や懇親会で親しく話をするようになった。氏の尽力で敷地内に英霊を祀る護国碑も建立された。話していく内にお父さんをブーゲンビル島で亡くされたとのこと、私が硫黄島現地教育に携わっている話をしたら、実はとその話を伺った。その中で「河野さん、私はお父さんと呼んだことがない…」と冒頭の言葉を語られた時のことが忘れられない。私の父が海軍に従軍するも中国青島から無事帰還、昭和31年生まれの私には想像できないことだった。氏は「お袋には苦労を掛けたから親孝行したけど親父には何もしていない、せめて今やれることを」これが氏の行動の原点だった。

2　ブーゲンビル

(1)　ブーゲンビルの戦い

ブーゲンビル島は、フランスの探検家ブーガンヴィルから命名された。赤道直下ソロモン諸島の一部で広さ10万平方キロ、最高標高3100メートルの火山の島である。

戦史叢書には「山岳地帯が縦走し、海岸部は狭く四国に極似している。年間盛夏、湿度は1年中猛烈に高くあらゆる物の腐敗は急速に進む」とある。米海兵隊員の手記で湿地に足を踏み入れると抜けなくなり、無理やり引き抜くと裸足だけ出てきて靴が泥の中に残り「ガダルカナルより酷い土地だった」という回想がある。



ブーゲンビルの戦いは、米豪遮断作戦の一環として昭和17年3月この島を占領し、飛行場建設を開始したことに始まる。ガダルカナル島の戦闘が始まるとラバウルからガ島を攻撃するための中間基地として重視され、すぐ北隣りのブカ島や島南部のブインに飛行場が完成した。17年6月の海軍のミッドウェーの敗戦及び攻勢の終末点である18年2月のガ島からの撤退後は戦況が悪化した。同

年11月に米軍が同島タロキナに上陸し、終戦後の20年8月21日までの約2年間の戦いである。このソロモン諸島の戦いに投入されたのは百武中将指揮の第17軍、ブ島を守備したのは神田中将が指揮する第6師団。歩兵は13聯隊（熊本）、23聯隊（都城）、45聯隊（鹿児島）で当時の最精強部隊だった。投入兵力は日本軍6・4万、米軍12・6万。戦死者は日本軍2～3万、多くが餓死、病死だった。6師団は3カ月分の食料で2年間に近い戦闘を強いられたと言われている。ガダルカナル島は「餓島」と言われたが、ブーゲンビル島は当時ボーゲンウビル島とも呼称され、「墓島」と揶揄される悲惨な戦いであった。ソロモン諸島の戦いに連携し幾多の海・空戦があったが、ミッドウェーで決定的な打撃を被った連合艦隊に往時の勢いはなく、一部米艦隊に損害を与えたが制海空権は米軍に移り活動さえできなくなった。その劣勢を鼓舞すべく山本五十六連合艦隊司令長官がこの島に進出したが、その情報は米軍に筒抜けとなり18年4月18日待受けで撃墜されたことでも有名な島である。長官はこの地で荼毘に付された。

(2) 父は・・・？

外木氏の父晴幸氏は明治45年静岡県富士宮市に生まれ、戦況の傾きかけた昭和17年5月に32歳で招集された（氏は3歳）。

豊橋にある部隊で訓練を受けた後、17年12月にラバウルのあるニューブリテン島で編成完結した第4揚陸隊に配属された。

この部隊は南西太平洋で船舶作戦に参加した。18年1～4月の間、ソロモン諸島船舶作戦やニューギニア船舶作戦に参加。その後一時フィリピン方面に転出したが、7月今村大将の第8方面軍指揮下となり8月～翌19年1月頃まで第3次ソロモン諸島ニューギニア船舶作戦に従事した。晴幸氏はこの時期に本作戦に参加した。この時は制海空権とも敵にあり、動きの遅い大発を中心とした夜間にしか輸送できない危険な作戦であり、その作業は困難を極めた。

この作戦に従事中赤痢に罹患しブーゲンビル島タリナの兵站病院に入院、18年12月2日戦病死され帰らぬ人となった。だが遺骨、遺品とも家族の元に戻らなかった。

3 英霊の心を伝える

(1) 招魂社

本年1月、外木氏から「石は千年持つから慰霊碑として建てたのに、今は水垢で見えないんですよ」と電話を頂いた。

私の故郷日南の実家の上の丘に招魂社があり、蜜柑山の途中にあるので帰省の度に慰霊に立寄る。招魂社は、国家のために殉職した死者を奉祀した神社で、私が小さい時、毎年慰霊のための招魂祭が行われていた。昭和30、40年代なので肉親を亡くした遺族は、まだ悲しみの消えない人もいたに違いない。当時は村人皆が集う賑やかな慰霊祭だった。

そこでは劇や民謡等の演芸大会が開かれた。私も小学校の頃、板張りの壇上に立った記憶がある。また自衛隊の銃剣道奉納試合、出店、部落対抗9人制バレー大会もあった。娯楽の少ない村人の楽しみで遺族以外も参加した。大人達は「お前達のお陰で今こんなに村は平和で元気を取り戻したよ」「何時までも忘れないから」と感謝の気持ちを伝えていたのだろう。ただ賑やかな祭りの後で生きていた頃の元気な姿を想い出し、人知れず涙した人がいたに違いない。それが今は地区毎の招魂祭が絶えて久しく、社は朽ち石碑の回りは草茫々、碑は汚れ名前を確認することができない。その中、元自衛官の兄は年に何回か忠魂碑の回りの草刈りをしている。国のために戦った村出身の若者達が、誰からも忘れ去られることに心を痛めている遺族がいるに違いない。

また、私の母の兄は大戦で中国において戦死した。市で統一して行われる慰霊行事に実家の叔父が参加したが、中国戦線の悲惨な映像を見せられ、慰霊というよりは「反戦」の色が強く、叔父は「何か違う」と不満そうであった。深くは聞かなかったが、「何時までも俺のことを忘れないでくれ」との英霊の心とは違う方向になっているのかと寂しく感じたことがある。

(2) 外木氏の活動

平和を謳歌している今、どこも同じような状況ではないか？　氏は行動に移した。昭和50年代、国や県の遺族会が戦没者遺児を対象に「青壮年部」を発足させた。当時から役員として「海外戦跡地慰霊巡拝事業」を始め諸事業に尽力された。本年4月お話を聞くために御殿場の自宅に伺った。

① 英霊の顕彰とは

護国神社の例大祭に参加しているにも拘わらず「英霊顕彰」の意味を理解していない国会議員を見て驚いたという記事を見たことがある。却って「違和感がある」「戦争を美化している」との談話。伺った時、氏が最後まで何度も強調されたのが、「英霊顕彰」の意味を日本人として正しく理解して欲しいということである。

「我が国を護るために、尊い命を捧げた人に感謝すること及びこのことを次の時代に継承していくこと」

② 遺骨収集促進基金募集事業

昭和54年「鶴田浩二ショー」を御殿場市民会館で開催し、これを機に青壮年部の会員募集ができた。収益金から200万を日本遺族会青壮年部に贈呈し、残金は遺族会員の遺骨収集助成金として使われた。これが組織として安定して活動できる現遺族会の基礎となった。この話を聞き「全てのご遺骨が祖国に帰還するまで真の終戦はない」の思いを継なぐためには、現実として活動する基盤が必要であることを訓えてくれる。

③ 「平和への道標」設置：静岡の慰霊碑800カ所の整備

街を歩いていると護国碑、慰霊碑を目にすることがある。そこには戦死者の氏名、建立の顕彰碑等がある。しかし長年の水垢で汚れ、しかも黒い字なので確認することが難しい。そうすると傍を通っても誰も見向きもしないようになる。そこで平和の担い手である子供達に「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」を理解してもらう一つの糧として、分かり易い文章にカナをふった道標を護国碑や慰霊碑の脇に設置し、子供達の目に直接触れるようにした。写真のように白地（白い背景）にすると目立ち、読んでみようと思うはずである。

萩原公民館の護国碑

現在県内200カ所の設置を終了し、御殿場は40カ所が完了した。氏は平成24年に「御殿場市戦没者慰霊碑ガイドマップ」を作成し、子供達だけでなく市民の目にも触れ易くなるよう工夫された。私は5カ所を案内して頂いた。

(3) 命の写真パネル展

また次の話も伺った。「県遺族会で一緒に役員をされた伊豆市出身の鈴木基之という方がいます。

鈴木さんは海外戦跡地の遺骨収集事業の貴重な写真をパネル化して『命の写真パネル展』を2001年から始められました。今まで71回開催されました。河野さんにも知人等にお話して頂き、都内又は他の場所でも是非会場を決めて頂ければと思います」

鈴木氏は84歳。父は19年マリアナ諸島で、36歳で戦死された。届いた箱は空だった。氏は父を慰霊しようと平成2年と5年に現地に渡った。しかし仕事に追われ遺骨収集には参加できなかった。知人を通じて遺骨を収集している写真に多くの骨が写っていた。鈴木さんは数千枚の写真を地域や時期毎に分け、展示できるようにパネルに作り直した。

ある大学で開いた展示会である学生が言った「『確たるものを持って生きているのか』と遺骨に問われた気がした」。氏は「切っ掛けがあれば若者は感じてくれる」そう実感した。パネル展の「戦場からのメッセージ」、それぞれの青春を謳歌することなく、一人ひとりの大切な人生を生きたくても生きられなかった。私たちはその訴えを重く受け止め、今を生きる命の大切さを実感し平和な社会へ一人ひとりができることからと、氏はパネル製作から会場準備まで全部自分でやられている。他県の出張の時も宿泊は自費。体力的な面では対応に制約が多くなっている中、ある年のパネル展を前に氏が呟いた「誰も来ないかもしれない、それでも命ある限り続けたい。忘れ去られるのが一番怖い」。

4 若者達は今

(1) 「遺烈」

外木・鈴木両氏は80歳を超えた。永年慰霊事業等に尽力された方々が、異口同音に言われるのが「若者に受け継いでもらいたい」という切実な願いである。先日細田先輩（陸自67）から「遺烈」という新聞が届いた。初めて目にする新聞だったが、「遺烈」の下に「題字：堀江正夫」とあった。先般「思いを繋ぐ」を、先生を主題に綴ったので何か不思議な縁を感じた。これは「日本青年遺骨収集団（JYMA）」の発行する月刊紙だった。先輩は「各地の慰霊碑を回り巡礼をしている」「若者達が

遺骨収集や慰霊に携わる姿に感動し支援している」と記されていた。

遺烈とは『故人が後世に残した功績・手柄』。昭和42年に在京大学生有志により結成され、戦場に倒れられた方々の最後の址を訪ね、戦没者の方々を祖国へお迎えする事業に参画している。その灯火は今も現代の若者へと受け継がれている。

活動の主旨は「先の大戦で亡くなった方々の命の一つ一つを紡いで得た平和を享受している我々が成す事は、全ての戦没者を悼む慰霊の気持ち、御魂の拠り所であるところの礼法の回復、そして崇高な行いの顕彰を続けていくことと信じ、政府主催の遺骨収集事業に参加することを継続する」とある。大学生の集まりで活動経費の調達に難渋している。この灯火を消さないため経済的支援が必須となっている。「遺烈」の他、年次活動報告書「今、何を語らん」も発行している。

(2) 若者達の思い（志）

① 入団の切っ掛け：新井君

大学の授業で戦後76年が経った今でも未収容の遺骨が120万柱（半分近くは海に沈む）あり、その収容に従事する団体があることを知りました。そんな折千鳥ヶ淵戦没者墓苑を訪ねる機会があり、行事や役割を教えて頂きました。それを聞き自分も参加したいと意欲が湧きました。20歳の年に新たなことを学べて、活動に参加することに私自身驚きがあります。先人の思いを背負い、次世代に継なげたい。

② 沖縄に初参加した時の衝撃と気付き

・小須田君

発見した時には遺骨の眼窩からは木の根が顔を覗かせていました。長い間お迎えすることができず申し訳ございません。犠牲になられたあなた方のお陰で私たちは現在平和に過ごすことができます。

・脇田君

遺骨収集という大きな責任を伴う活動に携わることに身が引締まる思いです。祖国のために戦いお護り下さった方が依然としてご遺族の元に未帰還であることを看過できません。一柱でも多く遺骨をお迎えできるよう尽力します。

③ ビジュアルで繋ぐ

・神保さん

ホームページを作成し逐次更新しています。幅広い事業の内容を項目別に分け見易さを意識して製作しています。自分が見る側になった時の見易さ、どんな情報を求められているかを考えて製作しています。このことでまた新たな仲間と繋がることが嬉しいです。

・学園祭でパネル展示を行った小林君

多くの方々の「どうして活動を続けているの？」、初めて硫黄島に参加した時、ご遺族から「お疲れ様、ありがとね」と泣きながら喜んでくれたことがあった。それが嬉しくて今でも続けているのかも知れない。

④「今、何を語らん」：大坪さん

この意味を沖縄初参加の時何度も反芻して考えた。遺骨が上がっても最初は何を語ろうとしているか耳を傾けていなかった。転換点は5日目、綺麗な頭蓋骨が見つかり目が合った瞬間だった。この人は子、両親、兄弟にとって大切な人だった。そう思えた。戦後76年が経ち風化は免れないが、彼らと向き合う心と意思があれば、遺骨はきっと永遠に何かを語りかけてくれる。

⑤ 卒業後に入団した中本君

最近どうしたら「思いを繋ぐ」ことができるか考える内に、こんなアプローチもあるなと示唆を頂いた。彼は心理学を学ぶ傍ら、ルワンダ大虐殺に纏わる歴史とその後の平和構築について探求し卒業論文とした。何故心理学の先生が？　彼は政治学や経済学の視点では隠れてしまう「人との繋がりの中の人間」という視点から紛争と平和を考えたかったからだという。友人から「日本人は同一民族か」と問いかけられた。YESと答えたが「琉球処分やアイヌについてどのように理解するか」に何も答えられなかった。このような無関心・無知から正に暴力が生じるのだと強く実感し日本の戦争と平和について興味をもって調べ、その過程でJYMAの活動に辿りついた。その中で所持品の発見を涙を流して喜ばれたご遺族の話を聞き、国や民族の未来を思い戦死された方の帰りを今も待つご遺族の期待に応えたいと入団した。このように多様な価値観を持ち、多様な分野で活躍する若者達が「日本の歴史を学ぶ」「人との繋がりの大切さ」について気付きの機会が多くなればと思う。

⑥ 喜んでくれる人がいる

共通してこれが若者達の活動の根源である。最も大切な事かも知れな

い。人に喜んで貰おうとする人は、必ずコツコツと真面目に努力するという。私もこんな若者達と共に歩いてみたい。

5　堀江正夫先生の思いを継な（繋）ぐ

永年「英霊の顕彰」「ご遺骨の帰還事業」に多大な貢献をされ、また次世代に思いを継なぐためＪＹＭＡの設立とその後の活動を中心となって支えられた堀江先生が２０２２年３月20日静かに旅立たれた。１０６歳だった。先生は、志のある方に遺骨収集を手伝って欲しいとの思いを多くの人に伝えるには、本に纏めて読んで頂くのが一番良いと亡くなる３日前まで机に向かわれた。そして最後まで見る夢は、今も祖国への帰還を待ち望む「草蒸屍水漬屍」の戦友の姿だったという。先生が亡き英霊への思いを込めて捧げられた詩

奥山に　人知れずして咲く　花にこそ　高く尊き　香りありつれ

「堀江先生、次の世代にこんなにも思いは伝わっていますよ」と報告できるよう若者達と思いを継な（繋）げていきたい。